作者

高橋源一郎

昭和二十六（一九五一）年一月一日～。小説家。広島県尾道市に生まれる。小説家。明治学院大学名誉教授。麻布中学校に進学するも父親の失踪にともない灘中学校に転入。灘高校を経て横浜国立大学経済学部へ入学（後に除籍）。しかし、当時は大学紛争中のストライキのため授業はほとんどおこなわれず、高橋自身も活動家として街頭デモに参加し、昭和四十四（一九六九）年に逮捕。翌年八月まで拘置されることになる。その後約十年間、土木工事のアルバイトなど肉体労働に従事する。昭和五十六（一九八一）年の「さようなら、ギャングたち」で作家として注目を集め、これ以降小説や評論の枠にとらわれない多彩な文学活動を展開している。日本の近代文学を現代の大衆文化と融合させるなど、パロディを駆使した前衛的な作風は独特。平成十七（二〇〇五）年に明治学院大学国際学部教授に着任（平成三十一年定年退職）。競馬評論家、ラジオのパーソナリティなど多くの顔を持つ。

文学活動

昭和四十四（一九六九）年十一月に学生運動にかかわった高橋は凶器準備集合罪等で逮捕され、翌八月まで東京拘置所に収監された。収監中に一種の失語症となった高橋は、その後の約十年の体験をもとに「さようなら、ギャングたち」を執筆し、昭和五十六（一九八一）年に群像新人長編小説賞優秀作を受賞。当時同作はそのとらえどころのなさのために評価が大きく分かれた。文芸評論家の吉本隆明は「現在までのところポップ文学の最高の作品」という言葉を送った。昭和五十九（一九八四）年「虹の彼方に（オーヴァー・ザ・レインボウ）」（中央公論社）、六十（一九八五）年「ジョン・レノン対火星人」（角川書店）を刊行。これらは「さようなら、ギャングたち」とあわせて初期三部作と呼ばれる。平成元（一九八九）年「文学がこんなにわかっていいかしら」（福武書店）、十三（二〇〇一）年「日本文学盛衰史」（講談社）、十四（二〇〇二）年「官能小説家」（朝日新聞社）、十七（二〇〇五）年「ミヤザワケンジ・グレーテストヒッツ」（集英社）、一九年「ニッポンの小説―百年の孤独」（文芸春秋）、二十一（二〇〇九）年「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店）など、日本の近代文学を半ば固定化された従来的な評価から引き離し、現在と接続して自由な発想でとらえなおした小説・評論・文学史を数多く発表している。令和二（二〇二〇）年よりＮＨＫラジオ第一放送で「高橋源一郎の飛ぶ教室」のパーソナリティをつとめている。

作者を解くカギ

言葉とは何か？　自明のようでけっしてそうではないこの命題を、高橋源一郎の小説は追及し続けている。その根源は、彼が八か月の拘置生活のなかで一種の失語症となった経験が大きいのではないだろうか。この体験を加藤典洋はこう説明している。

> とにかく、言葉が話せなくなり、書けなくなり、そうなって、それまで自分に空気のようだった言葉が、何だったのか、彼に、はじめてわかる、ということが起こる。もちろん言葉は自分と世界をつないでいる。これが使えなくなったら、ピンチだ。それはちょうど、自分と池の間の氷が、溶けてしまうようなこと

で、そうなったら、どうなる？――誰も、スケートを滑れなくなってしまうのである。（「解説　それって、どういう意味なんだい？――この小説の言葉、それからこの小説がそれでもやはり小説であること」「さようなら、ギャングたち」講談社文芸文庫　平成九）

こうした問題意識は、たとえば「さようなら、ギャングたち」にも顕著に表れている。その冒頭を見てみよう。

昔々、人びとはみんな名前をもっていた。そしてその名前は親によってつけられたものだと言われている。

そう本に書いてあった。

大昔は本当にそうだったのかも知れない。

そしてその名前は、ピョートル・ヴェルヘーボンスキイとかオリバー・トゥイストとか忍海爵（おしぬみじやつく）とかいった有名な小説の主人公と同じような名前だった。

ずい分面白かっただろうな。

物語世界において、事物に名前が付いているという事態が「本に書いて」ある「大昔」のあり方だという。言い換えれば、「わたし」はそうではない世界に生きているわけで、こうした感覚こそ高橋の失語症にともなう実感に由来するものにほかならない。「空気のようだった言葉」が遠ざかり、運用に支障をきたす感覚。現実世界とのかい離を突き付けられるような感覚に苛まれた高橋は、自分の言葉を模索し、その隙間を必死で埋めようとする。

以上のような〈当たり前〉を問い直すという思考・発想は、「歴史」や「文学史」という〈当たり前〉を問い直す本教材にも底流していると言えるだろう。

出典

本文は「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店　平成二十一）によった。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、以下の部分を省略した。

○「この本の中で、」（原文Ｐ六・14、教科書Ｐ三〇五・10「わたしは、」の後）〔教育上の配慮〕

○「もちろん、…遊んでいってください。」（原文Ｐ７・７～Ｐ７・９、教科書Ｐ三〇六・２の後）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

「思考としての歴史と行動としての歴史」（白ソフィア双書23）
Ｂ・クローチェ、上村忠男訳　未来社　平十

＊「歴史」に関する思考の枠組みを大きく転換した著作。原著が第二次大戦下の一九三八年に刊行された点も重要である。

「始まりの現象」（叢書・ウニベルシタス358）

エドワード・W・サイード、山形和美・小林昌夫訳
法政大学出版局　平四

＊本教材の出典「大人にはわからない日本文学史」の「七日目」で高橋源一郎はサイードを引用しながら日本の近代文学の「始まり」と「現在」の小説について論じている。

「大人にはわからない日本文学史」　高橋源一郎
岩波書店　平二十一

＊本教材の出典。本教材は「はじめに」にあたるが、「一日目」から「七日目」まで、「過去」の文学を「現在」と重ね合わせる形で「自分の『文学史』」を作っている。

「立ちすくむ歴史―E・H・カー『歴史とは何か』から50年」
喜安朗・成田龍一・岩崎稔　せりか書房　平二十四

＊カーの「歴史とは何か」を入り口に、「現在」の歴史をめぐる諸問題を論じたもの。

＊生徒用

「文字禍」　中島敦　（「文字禍・牛人」〈角川文庫　令二〉収録）

＊「文字禍」は「山月記」とあわせて「古譚」というタイトルで戦時下の昭和十七年、「文学界」に発表された小説。「歴史とは何か？」という問題が、同時期の権力の問題を巧みに射抜きながら言い表されている。

「歴史とは何か」　Ⅰ歴史家と事実
E・H・カー、清水幾多郎訳　岩波書店　昭三十七

＊戦後一九六一年にカーがケンブリッジ大学で行った連続講演を書籍化したもので、「歴史」という枠組みを考えるうえで必読の書。

「日本文学盛衰史」　高橋源一郎　講談社文庫　平十六

＊二葉亭・漱石・鷗外・啄木・花袋…、何を、どう書けばよいのか苦悩する日本近代文学黎明期の文学者たちが総登場する長編小説。

「日本近代小説史」　新装版　安藤宏　中央公論新社　令二

＊明治初頭から村上春樹まで、日本の近代小説を一冊で案内した入門的「文学史」。